



カラーユニバーサルデザインなどで施設全体のホスピタリティを高めた新病院。



2F外来のトイレ。楽しいピクトサインが施されている。テーマカラー以外の色をできるだけ使わないようにすることで、よりサインが際立っている。

2014年9月、これまでの病院の場所から西へ1.4km移動した新築移転によって、佼成病院が新しく生まれ変わりました。建物は免震構造、地下1階、地上10階で、病棟機能を主とした高層棟と、外来機能や手術部門が主となる低層棟から構成されています。色覚のバリアフリーを目指し、色覚異常を持つ患者さんも分かりやすく誘導できるよう、カラーユニバーサルデザインを導入するなど、画期的な取り組みも行われています。



杉並区と中野区南部の医療を主に担っている。

緑を取り入れるなど、病院の施設全体を「いのち」を育む豊かな環境に。

新病院の総病床数は340床で、急性期病棟が300床、療養型病棟と緩和ケア病棟がそれぞれ20床。災害拠点病院、二次救急医療施設、臨床研修指定病院としての役割を、移転前から継続しています。病院の施設全体が、「いのち」を育む豊かな環境となることを目指し、外構の南側には誰でも自由に往来のできる歩行者専用通路を設置。季節ごとに楽しめる色とりどりの植栽を配置しました。さらに5Fの屋上庭園もさまざまな種類の草花やハーブなどにあふれ、入院患者さんなどにホスピタリティを提供。単なる憩いの場としてだけではなく、患者さんが草木を見てホッとすることが病気の回復にも良い効果を及ぼし、リハビリの場としても、スタッフのリフレッシュの場としても利用されています。「からだ」「こころ」「いのち」を守る取り組みが、さまざまな観点から隅々にまで行き届いています。



病院の敷地内に設けられた開放通路。



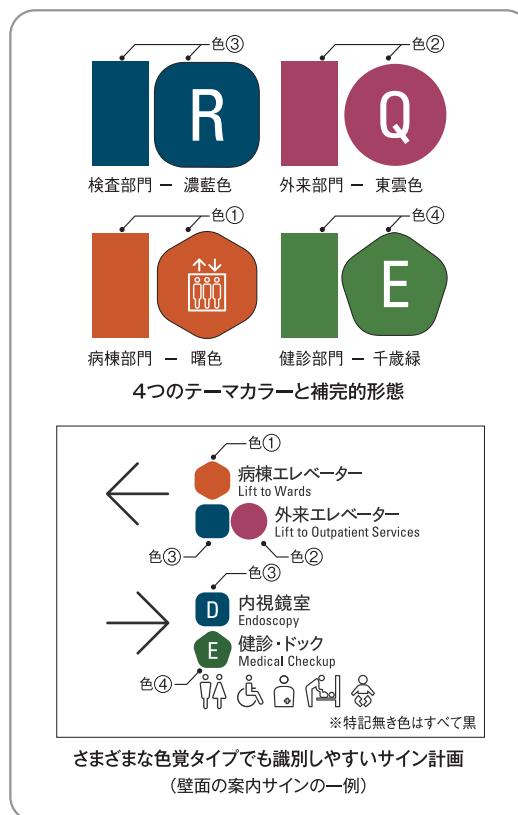
北側の病室から見下ろすことのできる、5Fの屋上庭園。レモンやオリーブ、ラベンダー、ハーブなど、100種類を超える草花があり、生物多様性にも配慮されている。

佼成病院

- 竣工年月／2014年6月
- 所在地／東京都杉並区和田2-25-1
- 施主／立正佼成会
- 設計施工／株式会社竹中工務店
- 延床面積／35,433m²
- 病床数／340床

「色」「形」「文字」の3要素で 分かりやすく誘導する カラーユニバーサルデザイン。

色覚異常を持つ人の割合は、日本人男性の約5%、女性の0.2%に上るとされ、国内に300万人いるとされています。そうした人々は、違う色の組み合わせが同じ色や似た色に見えて区別しづらいと感じています。新しい病院では、こうした色覚異常に配慮したカラーユニバーサルデザイン(CUD=Color Universal Design)を導入。病院内のそれぞれの場所を、部門やエリアごとに「色」「形」「文字」の3つの要素で表示し、例えば内視鏡室へ行く患者さんには「青い四角のDという所へ行ってください」といった説明を行っています。これによって色覚障害がある者だけではなく、誰にでも分かりやすいサインを実現。CUDが国内の病院で採用され、NPO法人カラーユニバーサルデザイン機構の認証を取得した、初めてのケースとなっています。



CUDの導入を推進した二階堂副院長先生からの声

患者さんを誘導するすべてのものを見直し、「見やすい」と評価されました。



佼成病院
副院长
二階堂孝さん

患者さん誘導のための院内サインの色を決める際に、例えばスタッフの中でも自分の好きなオレンジ色は、10人いれば10人とも違います。それぞれの意見を聞いていてもなかなか調整がつかないので、色を選ぶ指針をCUDにしました。色覚のバリアフリーを実現するとともに、一つの揺るがない軸を決めたということです。

色覚に異常のある人は、日本人男性では20人に1人ですから、かなり多い人数になります。しかし、このことはあまり認知されていません。ハンディキャップを持っている人が、それをあまり表に出したくないということも影響しているでしょう。こうしたことを院内で話し、CUD導入への賛同を得ました。一般の人とは異なる色覚を有する方々のことを考えたサインは、結果的に一般色覚者にとっても、整理された見やすいサインになります。

また単なるサイン計画としてだけではなく、建物全体で

CUDの認証を取得するには、フロアマップをはじめ再来機や精算機、エレベーターの階数表示、ナースコール、非常灯、消火器の表示、駐車場の満車・空車の表示…など、患者さんを誘導するためのあらゆるもので認証を得る必要があります。これをすべて行うのはたいへんな取り組みでしたが、病院の案内表示に新たな一步を踏み出すことができたと感じています。

CUDの導入に際しては、現場で色の調整も行いました。例えば同じ緑色でも、素材によって違う色に見えたり、照明環境、光の具合によっても異なります。それだけ微妙な作業の積み重ねになるんです。私の知り合いで色覚異常を持つ人にも検証に参加してもらいましたが、「非常に見やすい」と評価されました。患者さんの満足度調査でも、サインについては特に外来では評価が高く、迷わずに入院をご利用いただけているのではないかと推察しています。



設計担当の方からの声

おもてなしの心と可変性を、設計で重視しています。



株式会社竹中工務店
東京本店 設計部
設計第3部門
設計1グループ 課長
林祥子さん

この病院は住宅街の中に立地しているため、地域のアメニティを高めたいという想いがありました。環状七号線と住宅地をつなぐプロムナードには、誰でも寛げるカフェや売店を配しています。建物の内外で、自然の草花にあふれた緑豊かな環境を創造しました。病院全体で大切にしている「おもてなしの心」を設計にも反映し、屋上庭園やサインのピクトグラムなども工夫し、患者さんの緊張が少しでも和らぐようなものにしています。急性期病院として、診療棟・病棟とも可変性を重視して水まわりを計画。着工の前後には病室モデルルームを原寸大でつくり、トイレも含めて病院スタッフの皆さんに看護のしやすさなど、使い勝手を確認していただきました。もちろんトイレも癒しの空間となるように、空間や設備などに細かく配慮しています。



汚物処理室では、感染対策に配慮して非接触の汚物流しを採用している。



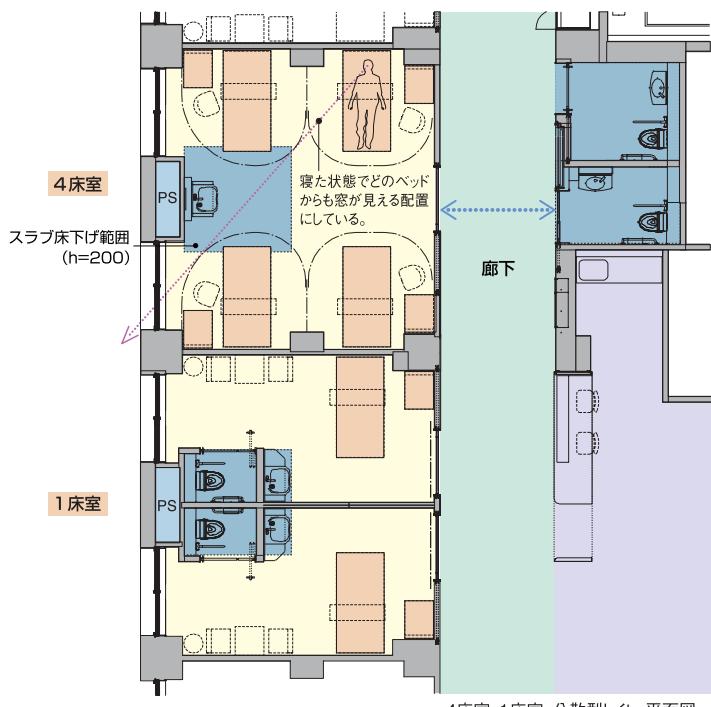
3Fの小児処置室内に設けられた、2槽式で使い分けもしやすい幼児用バス。

4床室の共用トイレは廊下を挟んだ位置に配してプライバシーにも配慮。

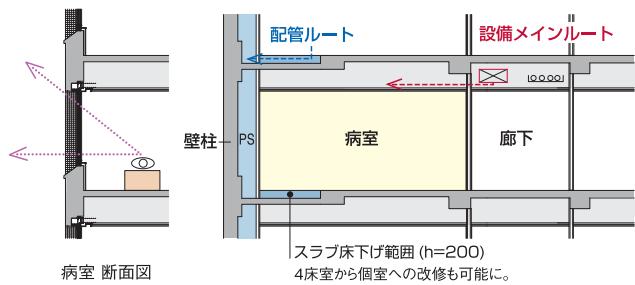
以前のトイレは集中型の男女トイレで、車いすや点滴の利用者が使うには狭い空間でした。新しい病院では、最初は4床室内にトイレを設けることも検討しましたが、音やニオイなど患者さんのプライバシーに配慮して、分散型のトイレを廊下の反対側に設置。個室のトイレは、看護動線を重視したうえで窓側に配置していますが、トイレの設置によって空間に圧迫感を与えないよう、大きな窓によって採光を確保しています。



病棟8Fの4床室。どのベッドからも寝ている状態で窓が見えるように工夫されている。



4床室・1床室・分散型トイレ 平面図



スラブ床下げ範囲 (h=200)
4床室から個室への改修も可能に。



病棟10Fの車いすトイレ。便器は壁掛けタイプで、跳ね上げ手すり、L型手すりが設けられている。

スタッフ用手洗器の数を増やし 便利で快適な手洗い環境を実現。

感染対策に配慮して、スタッフステーションの出入口や処置室など、適所にスタッフ用手洗器を配置しました。水はねや床への飛び散りも少なく、快適に利用されています。



スタッフステーションの出入口に設けられた、深型の手首までしっかり洗える手洗器。



3F泌尿器科外来に設けられた、尿流量測定装置付きの検査用トイレ。

泌尿器科に導入した尿流量測定装置が 患者さんと看護師の負担を大きく軽減。

泌尿器科の外来には、尿流量測定装置を導入。看護師さんに使い勝手をうかがうと、「旧式のウロフロメトリーの機器を使用していた時とは異なり、混雑時に機器の洗浄などでお待たせすることもなくなり、患者さんも看護師も負担がとても軽くなりました。患者さんからは、あまりにも快適に使えるので「ただのトイレだけど、本当にこれでいいの?」と聞かれることもあります」とのことでした。

看護師さんからの声

急性期と療養型のケアミックス病院ならではの難しい調整もありました。



佼成病院
看護副部長 **富山恵子さん** (中)
6F病棟(脳外科、耳鼻科、泌尿器科)
看護師長 **潮真規子さん** (左)
4F病棟(循環器内科、内科)
看護主任 **竹田慶子さん** (右)

新しいトイレは広くてゆったりと使って、車いすで入っても介助する充分なスペースがあり、点滴台もスムーズに入れます。跳ね上げ手すりとL型手すりにして介助もしやすくなりましたが、引戸にしたのもよかったです。便座は以前よりも少し高くし、立ち上がりやすくなりました。緩和ケア病棟のトイレのみ背もたれ付きにしたのは、体力がなくなつてもトイレを使いたいという患者さんの背中を支え、最後まで人間の尊厳を支えるためです。床材は、以前はPタイルだったりトイレはタイル貼りでしたが、シームレスの長尺シートにして床見切りもなくしたため、転倒対策上、より安全になりました。個室のトイレの位置は、特に緩和ケア病棟では、窓側ではなく入口側にしたいという想いもありました。窓の外を見ながらさまざまな空の変化、環境の変化を感じ取る方もいらっしゃいます。その点を強く要望しましたが、この病院が急性期を主とする療養型とのケアミックスということもあります、統一性をはかる必要があることも承知していました。患者さんのアメニティ向上には、窓を大きくすることで対応してもらいました。



10F緩和ケア病棟の個室。トイレは窓側に設置。



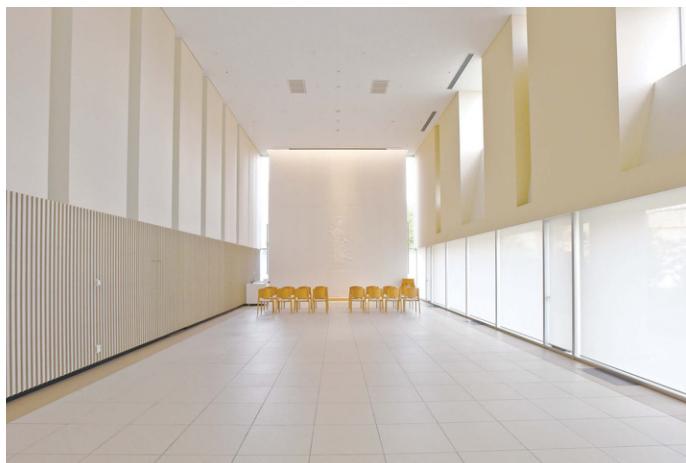
緩和ケア病棟のトイレは背もたれ付きである。



外来の多機能トイレには、オストメイト対応の汚物流し、おむつ交換台、ベビーチェア、姿見などを設置。

災害発生時を想定した 訓練やシミュレーションを実施。

当研究誌の10号で取材し紹介させていただいた災害対策についても、継続・発展した取り組みを実施。まず、建物では135台の免震装置が病院を支え、大きな直下型の地震にも耐えられる構造になっています。オイルタンクや非常用発電機を確保し、通常のライフラインを保つことで最低でも3日間は稼働できる体制を整備。トイレも雑用水や雨水などを活用し、排水槽も利用しながら使える環境になっています。また、看護部では災害発生時の「アクションカード」と呼ばれる行動指標カードを取り入れてシミュレーションを行うなど、常に非常時を想定した取り組みを推進。杉並区との合同訓練では、模擬患者さんを搬送するなど具体的な内容の訓練も行われています。



1Fエントランスホール隣の「観音ホール」は、イベントやセミナーなどが行われる120名収容の多目的ホール。災害時の治療の場として対応できるように、酸素と吸引のアウトレットを設けている。

Topics

災害対策トピックス ～熊本から～

済生会熊本病院の皆さまから、 熊本地震における病院の状況と 災害時に必要なことに対する 貴重なお話をいただきました。



熊本地震における避難所の様子

当研究誌では、東日本大震災の直後に、トイレの災害対策について特集（10号）し、その際に佼成病院にもご協力をいただきました。今号では、大きな被害が生じた先の熊本地震について、済生会熊本病院から研究誌宛に貴重なレポートをお寄せいただきました。



左から 医療安全管理室 係長
看護部長
感染管理認定看護師 主任
副看護部長

三隅留美子さん
宮下恵里さん
甲斐美里さん
村本多江子さん

済生会熊本病院は、井水を95トン貯留する受水槽を2台所有していますので、今回の地震では汚水槽も影響を受けず、停電もなかったため、トイレの使用が可能でした。しかし、震災直後は受水槽のタンクの1つが破損したため、入浴やシャワーを制限するなどの節水を徹底し、修理が完了するまでの間をなんとか乗り切ることができました。

しかし近隣の病院では、断水によりトイレが使えない状況となり、ポータブルトイレにオムツを敷いて対応するなど、トイレの環境は施設によって差がありました。

避難所となった近隣の小中学校は、断水していました。当院の感染管理認定看護師は腸炎などの感染症の発生を危惧し、避難所を巡回し、手洗いやトイレなどの衛生環境を確認しました。そこではトイレの数も不足しており、また、トイレまでの距離がありました。洋式便器がほとんどなく、あるのは和式便器ばかりでした。また、スリッパへの履き替えが必要な状況で、高齢の方には辛いトイレ環境でした。排泄後はバケツに汲んだ水を流して利用していたため、トイレの床が水浸しとなるなど、衛生的にも問題の多い状況でした。そこで私たちの病院では、外来トイレを避難所の方へ解放し、多くの方々に利用していただきました。

特に避難所生活や車中泊の方の中には、トイレに行く回数を減らそうと水分を控える方も見受けられました。肺塞栓症の診断で当院に入院された14人の方は、避難所生活や車中泊の方でした。

今回の震災を受けて、有事に備えた仮設トイレ…特に洋式便器のものを、平時から必要数確保しておくことの必要性を感じました。